

景観フォーラム

巻頭言

ランドスケープデザインは20世紀にその本格的な動きが見え始めました。これは、現代芸術の動向とかなり密接な関係にあったといえるでしょう。それはまさに2次元芸術から3次元芸術への飛躍であり、モダニズムが齎した美学への参画となったのです。産業革命が一段落した後の動きとして、今までに園芸とか造園と言われた世界から、人間が生活する環境そのものを考察し、地域コミュニティが生き生きと活動できるように、生態学的な空間をいかに提供できるかを追求してきたといえます。地域コミュニティの存在が前提となり、ランドスケープ即ち景観の問題が論議されるというのが現代社会の景観論です。ところが、そのコミュニティの存在を全く無視するような動きが現代日本社会に生まれてきているようです。

憲法論を研究している専門家から、“憲法違反”と明示されていながら、それは学者の言うことで、政治家は国民の安全を保持しなければならないので、安全保障法案を改訂するという論議を一国の首相が言っているのけております。その姿を見て学生諸君はどのような気持ちでいるのでしょうか。学者という存在は無意味になるし、専門家というのは政治家のみになると言っているようなものです。国会議員である政治家は国民が選んだのであるから、政治家の声は国民の声である、という理屈になるでしょうが、恐らく国民一般の気持ちは憲法学者が“憲法違反”といわれている法案をたとえ偉い政治家が合憲であると言っても納得はしないでしょう。

しかし、残念ながら、この現代日本という国には既にファシズムが始まっていると言った方がいいでしょう。70年前300万人という日本人の尊い犠牲者を出した果てにファシズムは消えてなくなったはずなのに、その種は未だ消滅せずに残存していたといえます。憲法9条だけでは平和は確保できないのでしょうか。

(斉藤全彦)

〈予定〉

景観セミナー

- ・7月22日(水) 19:00~20:30 「ストリート・リノベーションの景観論」

景観まちあるき

- ・9月12日(土) 13:00~ 成田市 (セミナーとまちあるきを同時開催の予定です)
- ・10月31日(土) 13:00~ 小田原市

景観ワークショップ

- ・11月18日(水) 18:30~ JICA研究所

理事会・

- ・10月27日(火) 18:30~ JICA研究所

運営委員会

- ・8月5日(水) 19:00~ 飯田橋オフィス
- ・9月30日(水) 19:00~ 飯田橋オフィス

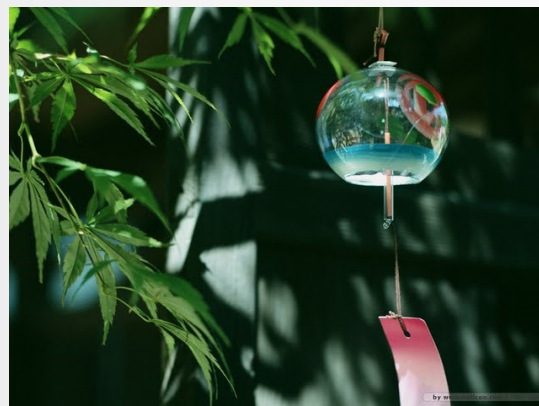
忘年会

- ・12月16日(水) 18:30~ 某所

〈お知らせ〉

「クラシカル真鶴」お試し暮らし事業スタート!

詳細: http://www.town-manazuru.com/h27_kurashikarumanaduru



建築関連法規から見た日本の都市景観について (2)

一級建築士事務所 SOGLIOLA 東亭 邦夫

前回、大きく景観に係る法律としては、都市計画法と建築基準法があり、この2つの法令には景観と言う概念が欠如しているお話しいたしました。個々の建物については詳細に規定されていますが、都市全体から見た場合、ある統一したイメージで景観を形作ることには触れていません。

建築の世界で、戦後の発展は目覚ましいものがあり、それ以前に比べて高度に工業化が進みました。1950年ぐらいを堺に、それ以前にできた建築とそれ以降にできた建築を比べると理解出来るのではないのでしょうか。日本ではある一部の地域を除いて、ほぼ全ての建築が戦後にできた訳ですが、これは日本に限られた話ではなく、看板のデザインや文字がその国のアイデンティティを表すくらいに世界の都市景観を均一化しました。いわゆる建築技術のグローバル化です。それぞれの国の法令は違っても、法令だけでは都市がアイデンティティを持つことのできない時代に入った事を意味しています。

1950年以前にできた都市では、それ以降にできた建物についても既存の建物との調和が求められ、かろうじてアイデンティティを維持できました。こうした場合は、その国の建築関連法令が都市景観に大きく貢献したのは皆さんの知るところだと思います。ヨーロッパの都市が先の大戦で壊滅的なダメージを受けても、それ以前の都市景観を再建したのは、単に効率や経済性を追求するのではなく、都市のデザインや景観についての合意が出来上がっていた事によります。古い建物でも保全が求められ、都市のアイデンティティが保たれてきたのです。しかし、多くの都市では、建築の技術が都市を形成する同意の形成より早いスピードで進化した結果、現在のような景観を形成しています。ここでは、都市の経済性・効率性が優先され、安全性を主軸に法令が整備されています。

建築技術に制限のある時代では、同じ仕様の物を作るにはさほど問題はありませんでした。今のように自由に選べ、グローバル化した建材の世界が構築された現在、50年以上前の地域の独自性を保持していくには、現在の建築関係法規では限界が生じてきています。ある地方都市の景観条例で、外壁を白くし、軒の高さをそろえるよう指導している所がありますが、一概に白い壁と言っても昔の漆喰で建築する建物などは無く、その質感は景観条例が意図する白さを表現するにはほど遠いもので、今で言う「なんちゃって〇〇」になっています。また、石垣を都市デザインの重要なコンテクストにしている町でも、石垣そのものが建築法規上、既存不適格なものとなっており、防災対策上障害になっている場合もあります。

台風・地震・火山・火災など、日本は世界に類を見ない災害大国です。災害で壊れてしまっても、また同じ物を作って、それで良しとする国民性ならば良いのかもしれませんが、しかし、日本人でそれで納得できる人は少ないでしょう。津波と言うオプションまで加わった現在、どうしたら魅力的な景観が出来るのか、今、日本は試されています。世界のどこを見てもお手本は存在しません。

日本は木造の町家文化として都市を発展させてきました。近代都市とうまく融合するには無理があります。現在の日本の状況を統一した法規で一括管理をする限界がきているのです。地域の特性を汲み取り、柔軟に対応することが求められています。それは一市町村でも、地域を絞って強力で推し進めることができる法規制です。地域創世や観光立国が叫ばれるのであれば、現行の建築基準方や都市計画法の枠組みを越えた地域の裁量が求められるはず。やはり日光江戸村やディズニーランドのようなテーマパークでないといけないのでしょうか。

これで建築関連法規から見た日本の都市景観についてのコラムを終わりにしたいと思います。多くの地方都市で独自の地域性を出すのが難しい状況に置かれています。地域が強力なリーダーシップを持ってしても難しい状況がそこにあります。面倒でもそれを受け入れられる合意も必要です。しかし、こうした事の一つに建築関連法規があると言うことを少しでも皆様にご感じていただけたら嬉しく思う次第です。

尾道散策・・・ (1)

開港800年の歴史は幾重にも心を潤す。海と山、お寺、坂と路地(と猫)、尾道水道、船、映画のロケ地、林芙美子に志賀直哉、新鮮な魚、ラーメン、ワッフル、サイクリング・・・もう、魅力がいっぱいで何から堪能して良いのか分からない。山には中世を感じる塔、街は大正時代や昭和初期の建物や看板のお店があふれ、様々に混じってそのままの姿で迎えてくれる。ノスタルジックというよりも、とにかくそのまま現実で日常であり・・・。

景観まち一人歩きを始めてみた。まずはこれぞ尾道というような狭くて急な石の階段を登っていく。珍しい洋風木造建築とかで有名な「尾道ガウディハウス」に辿り着いた。



空き家再生のシンボル 尾道ガウディハウス

いきなり近所のオジサマに叱られてしまっ

た。「観光客に分かるように案内表示をするように!」。どうやら、観光事業関係者に勘違いされたようだが、「観光名所」とは「再生された空き家」である。言われてみれば、観光地でよく見かけるはずのインフォメーション看板があろうはずがない(ような気がする)。しかも複雑な路地は迷路そのもの。ここでは脳内地図フル稼働、観光はセルフサービスなのだ。面白い! 次から次へと自分で発見する喜び、日が暮れカラダがクタクタになるまでワクワク感が続く。この面白さも手伝ってか尾道を訪れる人は近年倍増、年間600万人を超えているらしい。土日は「しまなみ海道」を走るサイクリストの聖地、更に日本の建造物LOVEの外国人もいっぱいだ。



さて、そんなビックリな尾道だが、この街は何故こんなにも賑っているのだろうか? 尾道在住の人に訊いてみた。「とにかく熱い!!」(瀬戸内開発・竹山伸彦社長) 「熱い」とは? 一体その「熱さ」はどんなふうなのか? 解明したいと心が湧く。

尾道は中世より瀬戸内の「陸と海の十字路」の中心として繁栄を極めた街。尾道水道

沿いの道路と遠く山陰の石見銀山へと続く道路。その道路も「平成版」ともなると「しまなみ海道」に接続する高速道路「尾道松江道」が開通し、車社会の総決算とでもいえる時代となった。だが、尾道は車が通れない坂や路地だらけ。寂れていくはずの旧い街・・・しかし、尾道の建物は惜しまれて消えるのではなく、心惹かれる憩いの空間として次々と蘇っている。尾道中心市街地の道路や路地はただの通り道ではない。憩いの場、人と人を繋ぐ空間の連続、空き家は文化的価値や経済的価値を創出する宝物。「守りたい」「夢を実現したい」という想いが花咲く空間。最近は店舗開店を希望する若者も多い。古い建物を再生して生活や文化のコミュニティ創りまでプロデュース、資金調達からDIYまで行う「NPO法人尾道空き家再生プロジェクト」は大忙しだ。理事長豊田雅子さんのもとには多くの移住希望者やお店をオープンしたい人、それを支える建築家や大工さんなどが集まる。建物や場所の個性と技術を最大限に活かし、住まいや、カフェ、アトリエなど安らぎや創造的な空間へと再生する。今、空き家が足りないほどになっているという。尾道の多様性を受け入れる自由な文化の中で自分の好きな道を歩みたい、それを叶えたい場所がこの古い街並みの中であり、尾道らしい景観のあるところであり、ここに住みたいという人たちがたくさんいる。そして、少しずつ街並みが継承され、新しく賑わいを生んでいる。

この街には井戸もたくさんある。商店街を歩いていると、何やら井戸を漕ぐ若き女性と、パソコンと録音装置を操る(ダンディな、いや怪しい?) 男性2人に遭遇。井戸の

調査? あまりにも興味津々だったので、「何をしているのですか?」と訊ねると「撮影中です。静かに!」 そうここは尾道、街全体がオープンスタジオ! 尾道市立大学芸術文化学部の学生さんと、映像専門家であり尾道の映画文化けん引の大谷治先生→有名なワッフルのお店のオーナーと分かり、美味しいワッフルと私の景観ミッションが脳内対決する中「あの、私・・・景観について・・・」そして熱い路上講義が始まった。大谷先生曰く「景観、情景、ストーリー、この3つがあって初めて成熟した街になります。」「人と人を繋ぐものそれはファンタジー、つまりお化けとか・・・ここでは『水の神様』ですね。すごいパワーを持っている。ほら、実際に水の繋がりによって社会も形成されてきたでしょ」「尾道は、自分のストーリーを自由に表現することが出来る街、どこでもアートな街。みんな一人一人映画になるほどのストーリーをもっている!」実際、街中では色んなところで色んな人のギャラリーやライブ、セミナーで満たされていてちょっと心が呼び覚まされる。それも自然に。

街は、こんな風に熱い人たちでいっぱいだ。



石畳の小路 通り抜けると雨宮敬子の彫刻と海がある

都市研究家ジェイン・ジェイコブスについて聞いたことがあるだろうか？ 今、尾道の街を想う時、彼女の思想が重なる。彼女は「アメリカの大都市の死と生」において、車社会を中心とした機能的な近代的都市には生活を営む人間の存在が欠如していると指摘し、人間的魅力を備えた賑う都市の特徴として4つの原則をあげた。①街路は狭くて折れ曲がっていて一つのブロックが短くなければならない②各地区に様々な種類の古い建物が混ざりあって、建物がもたらす経済的収益が多様でなければならない③各街区に2つ以上の用途・目的の建物があり、多くの施設を共通利用できること④人々が高密度に集積していること

どうだろう、ジェイコブスの4つの原則にまさにピッタリと当てはまっている。

「熱さ」を生む理由の一端が分かったような気がしてきた。尾道は、まるで毛細血管のような機能をもっている街。独特な地形、街路、建物とそこで培われた人々の文化や心意気、この有機的な繋がりこそが「熱さ」を生む源泉のひとつに違いない。この尾道の様々にほっこりさせてくれる景観は、私たち人間的営みの写し鏡のようにも感じられる。

(気が向いたとき、第2回へと続く)

安川久美子



「海が見えた、海が見える」林美子が見た景色の夜景

<LFJブックレビュー43>

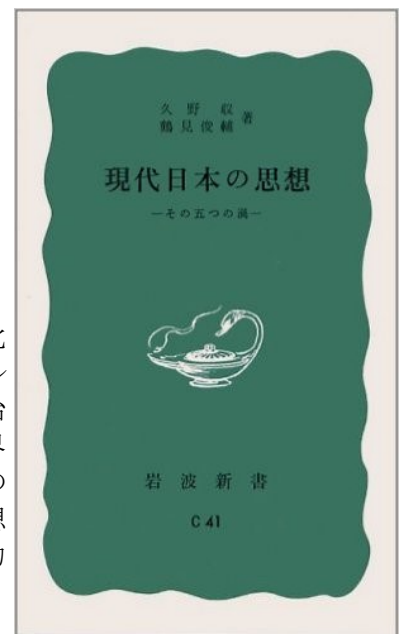
『現代日本の思想』久野収・鶴見俊輔著 岩波新書 1956年刊

「景観とはその土地に住む人々の思想の現れである」とあえて私は言ってみよう。日本各地でも色々な景観があり、世界のそれぞれの国々でも特色ある景観を示している。確かに、現代都市の典型といえばニューヨークの摩天楼を想像される方もおられることであろう。しかし、ニューヨークを全く知らない方々も地球上にはたくさんいるはずであり、その人達にとっての現代都市とはどのようなものを思い浮かべるのであろうか。

さて、思想を語る場合、宗教の存在は必見であろう。欧米の思想とはキリスト教が中心的存在であり、東洋では道教、儒教、仏教、ヒンズー教、中東諸国ではイスラム教、そして日本の神道という宗教を鑑み、それらの宗教を基本に諸々の思想が開花されている。しかし、その存在自体を信仰の対象にしていない儒教と仏教は単に宗教とみなしては若干無理があるだろう。日本の思想を語る時この神道という宗教が底辺にあり、そこに儒教と仏教という思想が入り込んだものといえよう。現代思想にスポットを当てる場合は上記基本思想を下に明治維新以降の思想、即ち現在から150年弱の日本思想の流れを問うということになる。

先ず、著者は日本の近代の夜明けとして白樺派を取り上げる。観念論として捉えてはいるが、明確な近代思想としてヨーロッパ思想に強く影響を受けた思想潮流の始まりと考えられる。次に、マルクス主義が思想の潮流に踊り出す。「アカ」と呼ばれた日本の唯物論の受け入れは政治運動の思想として表れた。方や、日本思想は米国の影響下として、プラグマティズム（実用主義）が大変根強く思想運動としてもてはやされた。その後、昭和維新の思想として天皇を担ぎあげた超国家主義という思想潮流による経済的大不況の克服、その流れは残念ながらあの侵略戦争へと突き進む。そして、敗戦後はヨーロッパの実存主義が戦後思想家たちを捉え現代に至るといふ流れを説明している。この書は1956年に発刊されたものであり、その後の半世紀余りの思想を語ることは私たちの責任に帰すると言えよう。

景観を語る時なぜ現代思想を問わなければならないか。それは、近代化即ちモダニゼーション(modernization)によって日本人のライフスタイルが激変を被り、それはまさに景観そのものに表れているからである。明治維新の頃、欧米諸国は産業革命の総仕上げの時代に入っていた。欧米世界でもこの革命が大きく景観に影響を与えることになるが、日本における影響はその比ではなく、夏目漱石に「則天去私」といういわば諦めの思想を思いつかせるほど、日本教養人の根本的思想を滅却させるほどの影響力であったといえよう。（齊藤全彦）



天地玄黄 ⑥「新国立競技場の景観問題について」

現在、神宮外苑において2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに向け、新国立競技場及び付帯設備の建設が進められている。巨大な競技場の建設をめぐっては、神宮外苑の環境や景観を大きく変化させることから、この間、多くの議論が行われてきた。

神宮内苑・外苑は、1915年（大正4年より造営が開始され、1937年（昭和12年）に竣工している。明治期には、代々木、青山練兵場であり、不毛の原野であったが、都市における豊かな森が一世紀の歳月を経て、人の手により創り出されてきた。当該地域は、日本における風致地区の第一号指定地であり、1964年のオリンピック時に暗渠となった渋谷川が流れている。このような背景を踏まえて、新国立競技場の建設にあたっては、「周辺環境に配慮する」ことが明文化されている。

しかしながら、現在、2019年に開催されるラグビーワールドカップまでの新国立競技場の竣工という時間的制約の中で、樹木の伐採と国立競技場の解体が進行しており、環境との調和については、十分な配慮が講じられているとはいえない状況となっている。

神宮外苑は都心の中でも緑が豊かな美しい場所である。いちょう並木に代表される神宮外苑に足を踏み入ると、原生林をさえ彷彿とさせる無数の古木巨木から森の香りが漂う。ヨーロッパの庭園に学んだという外苑は、緑地と建物が秩序だてて配置されている。自然と文明の両方に触れることができる貴重な空間だ。現在の国立競技場がある場所も都の風致地区で地区計画では景観等に配慮するために、建築物には高さ20メートルの規制が設けられていた。しかし新国立競技場の設計の規制は高さ70メートルとなっており、これは20階建のビル以上に相当する高さのようだ。さらに日本青年館、明治公園、都営霞ヶ丘住宅をも取り壊す前提となっており、敷地面積は現在の1.5倍、延べ床面積は現在の5.2倍の約22万㎡にもなる。屋根は開閉式で、観客席は常設で8万人の予定だ。

あまりにも巨大な建築物とは思わないだろうか？周囲に威圧感を与え、神宮外苑の風景を一変させてしまう。完成予想図の左上を走る青山通りから、左下の絵画館に向かって歩くことを想像してみる。現在であれば、銀杏並木に囲まれ、東京の真ん中にいるとは思えない静かな雰囲気味わえる。ところが新競技場が完成すると、銀杏並木の向こうにその威容がドンと出現することになる。

東京の景色が変わることを喜ぶべきか悲しむべきか。ある人にとっては悲しむべきものが、ある人にとって喜びに変わるものだという事は当然起こりえることであり、これは今回の新国立競技場にも当てはまる。賛成か反対かの二者択一の問題にせず、オープンな議論する場を設け十分に議論してもらいたいと願っている。 執筆 「神宮好きの親父より」



〒150-0031

東京都渋谷区桜丘町14-5-502

TEL : 03(3780)3814

FAX : 03(6379)6681

E-mail : info@keikan-forum.com

URL : http://www.keikan-forum.org



Landscape Forum of Japan